

人口問題研究所
研究資料第二八號

昭和二十三年六月

日スト生産力の理論に於ける人口思想

厚生省・人口問題研究所

一、序言

二、リストの課題

三、農業國と人口

四、農工業國と人口

五、農工商業國と人口

六、リストのマルサス批判

一六

一三

一〇

七

三

一

一 序 言

フリードリヒ・リスト（一七八九—一八四六）は、独逸が舊き生産関係の支配する封建体制に差別をつけ、新しい近代國家として生誕する転換期に当り、カメラリス的教説の支配と、舊き政治的諸力と戦ひながら、他方既に産業革命を了して新しい生産関係の展開をなしつつあつたイギリスの経済的及び思想的攻勢に対抗しつつ、新生独逸の昇進に対し、学問と実践との両道を通じて着しい影響を與へたのである。

彼の思想の根本をなすものは一言で云へば、経済発展の理論であるが、此は彼の云ふ如く、正史の教訓に基くものであることば云ふ迄もなれが、又その止む難き、祖國発展の実践的要請に根ざすものであることも否定し難い。

今、こゝに問題とする、彼の人口思想も、勿論、この根本思想に沿つてのみ理解されるものである。

リストに於ては、生産力の発展が主目標であり、あらゆる努力は之れに向つて集注されるべきであつた。従つて一國人口も生産力との関係に於て問題となるのであり、就

中、發展する人口が主題であり、現存する過剩人口は歴史的なものである、やがて招
來さるべき生産力の發展によつて完全に吸収さるべきものと考へられてゐる。

従つて、彼は、マルサスの人口觀に対しては、それが、發展を無視して、人口と生
活資料との不均衡を前提とすることの誤謬を指摘し、マルサスは人間の發展の原動力
を無視し、人の心を化石せしめ、あらゆる進歩と發展とを人類より奪ふものであると
痛罵を放つてゐるのである。

勿論、彼に於ては歴史的意義に於ける人口問題の複雑性と多様性とは知られなかつ
たのであり、極めて素樸な人口發展論が窺はれるにすぎないのであるが、これは後進國
独乙の現實を反映するものであり、又その故にこそ、その前進を企圖した政策的必然
の結果であつたといふ、よう、換言すれば、このことは、彼の終生の目標であり唯一
の課題であつた独乙の工業的發展の中心念願のものには、生産力の發展によつて、基
本的な生産用役と結合し得ざるが故に過剩人口も存在し得ず、人口の増加と資本の増
加とは、常に發展のなる資本構成の成長に於ては、平行的に、否むる場合に於ては、

後者の方がをしる先行的に進行しうるものと考へられるたことの当然の帰結である
と考へられる。

以下主として、Das nationale System der Politischen Ökonomieに

依拠して、先づ、リスト的課題の本質を明らかとし、彼の發展段階的觀察に照応して、
農業国、農工業国、農工商業国の各段階に即したる人口發展の様相並に之に対する見
解を概観し、最後に、当時すでに、リスト的發展の最終段階に到達してゐた英國の現
實を背景としたるマルサス人口論に対する彼の批判を窺ふことによつて、この小文を
結ぶこととする。

(二) リストの課題

在來の支配的學說に對する、リストの新しき立場といふべきものは、世界主義に對
立する國民主義的思想及び、交換価値に反對する生産力思想の二つに要約される。
リストの全体系は、この二つの思想を基礎として構成されてゐるのである。

リストによれば、アダム・スミスの学説は、万民主義の前提に立つものであり、ミスに於ては全人類が一つの共同社会に結合され、そこでは國際的対立は排除されるものとされてゐる。かゝる社会に於ては、人類は単に、孤立せる個人の集合にすぎぬが故に、個人の利益のみが重視され、終極的自由に對する干渉は正当化され得ない。然し歴史的現實の示すところは、個人と全人類の中間に、國民の存在を以てしてゐるのであり、これはスミス學派に於ては兩却せられたるものであつた。

人類社会が普遍的に相協和するとは、勿論それ自体一つの理想であり、その完成に向つて努力するべきである。然し現實に於て諸國民は異なる利益を有し、しかも不平等である。普遍的結合は、彼等が平等の基礎の上に立つときにのみ一般に利益を與へるのであり、然らざるときはその中の一國民のみを利益し他の國民は犠牲を負担しなげればならぬであらう。

かくて、リストの見地に於ては、各國民の實際利害及び特殊事情を考慮して、如何

すればその國民は、自由貿易によつて他の文明國民との結合が可能且つ有利でありうる。經濟的進歩の段階に到達しうるかを考慮実践することゝが唯一の任務となるのである。

リストは、經濟社会を靜態的に分極せるスミス学派に對抗し、之れを動的に、その發展の過程に於て把握せんとした。即ち、經濟的段階を區別し、經濟の發展を、未開、牧畜、農業、農工業、及び農工商業時代の五段階に區別して、一國民はこの最後の段階に到達した時が、正常であり、これを以て一國民の追求すべき理想状態であると構想してゐる。而してこの段階に於てのみ、國家は多数の人口を養ひ、技術と科學との完全なる發達を確保し、而して國家の獨立及び權力を維持しうるのであると説いてゐる。

リストの時代に於ける特色は、本質的に農業國たる特異の状態を呈し、而して封建制據して、政治的經濟的統一は阻止され、工業はギルド的統制下に置かれ、農業は封建的束縛に委ねられてゐた。一方英國は産業革命を完了して世界の工場たる地位を占め

その商品は大陸に汎溢し、且つ穀物関税の設けによつて独乙の小麥は市場を喪失し、一八一六年の大凶作も福として、当時の独乙は一般に経済的不況と共に人口過剰の状態に陥り、年々多数の移民を放出するの止むなき状態に在つたのである。

かかる國情を背景とし、之れを如何にしてその理想とする経済状態に迄發展せしむるかを企図する実践的要求のもとに、彼の生産力の理論は生じたものである。之れが具体化の方策としては先づ何よりも國內市場の統一が要請され、その市場形成によつて独乙工業力發展の爲の基礎を與へんとした。而して之の保護政策は専らこの見地よりの要望に他ならぬ。

リントは、生産力を「富を創り出す力」と理解してゐるが、之れを個人的（精神的及び肉体的）、自然的、社会的、市民的、政治的及び物的の諸要素に分ち、且つこれら諸生産力要素中、物的生産力を特に重要視し、又物的生産力の三構成要素―工業生産力、農業生産力、及び商業生産力のうち、工業生産力を最も基礎的な要素とみなし、他の諸々の生産力要素に対する基本的な地位を與へてゐる。即ち、工業力の發展程度

*

如何が、全生産力の程度を決定し、全経済力の程度を決定し更に政治力の程度及び文化の程度を決定する鍵とあると考へるのである。

さて、独立経済の発展によつて最も重要な国内市場の創設は、分業と協業、或いは生産力の分割と結合によつて達成せられると考へる。この生産力の分割と結合とは、農業と工業との間に典型的に行はるべきである。この農工業間に於ける生産力の分割と結合こそ、国内市場形成の枢軸であつて、その進展につれて国内市場は漸次開拓せられるわけである。即ち、工業と農業との完全な均衡を保つた国内的を育成によつてのみ、眞実の国内市場は形成せられ、これによつて、独立はより高次の生産力を、従つて又より高い富と政治力とを所有するに至ると考へたのであり、国民体を基盤とする独立経済の国内循環の完成こそ、リスト当面の課題であつたのである。

(三) 農業國と人口

独立の農業に於ける段階を止場として、農工業國、更に農工商業國ならしめんとする根

本目標を追求するものとして、彼の生産力の理論否、その全体系は理解すべきものであるが、彼は、當時に於ける独乙農業の萎縮状態は、その主要原因を、農産物の海外依存性にあると考へた。即ち、当時の独乙の小麥は、対英輸出に依存し、常に英国市場の情勢によつて左右され、たゞ不安定な状態に置かれてゐたのであるが、一度この小麥が英國市場から遮断されるならば、たちまち販路凝滞して、生産は縮少を余儀なくされ、独乙農業は漸次萎縮せざるを得なかつたのである。かゝる萎縮せる農業は、概中、当時南独乙農業の窮迫と、農民流出に最もよく現はれてゐるものであつた。この如き状態に於ては、優秀な、若しくは漸次発展しつつある工業力缺如のため、増加人口~~X~~はすべて農業に吸収され、余剰農産物を喰ひ盡し、而して、この人口過剰が生ずるや否や、國外に移住するか、或いは従来居住してゐる農業家と共に、現在の土地に分配され、各農業家はその所有地が極めて狭小となる結果、自己需要中緊急不可缺のもの、みを生産し、交換に供すべき余剰生産物を生産し得なくするに至るのである。

工業力の發達を伴はぬ「單なる農業國民」は、その内外商業、その國內運輸機關及びその對外的航海業を發達せしめることを得ず、その人口をその幸福と比例して増加せしむることを得ず、或いは、その道德的、智識的及び政治的發達に於て顯著な進歩を認め得ないのであらう。若し一國が單なる農業國の段階に止まる限り、その經濟循環の範圍に於て正常に擴張しうる人口は限られたるものであり、一度經濟變動によりその循環が縮小さるゝや、たちまち過剩人口に悩むに至る。例へその經濟が正常な循環を繰返へしても、何らの發展を予期し得ない。

これは、當時の独乙經濟の停滞性より容易に帰納しうる所であるが、かゝる段階に於ける停滞人口、乃至過剩人口は、その國の生産力の發展、換言せば、その工業生産力の發展による、經濟の構造化によつて自然に解決しうる所であると考えたのである。リストによつて一國經濟の本質的發達は、只工業力の發展による拡大生産を通じてのみ可能とされるどころであつた。

四 農工業國と人口

一面に於て、優れたる農業政策家でもあつたりストは、農業の萎縮状態を救ふため、漸極的には過剩人口の海外移住の必要を説くと共に、積極的には工業主義者として立ち現はれ、工業力の培養を力説する反面に於て、却つて、よく農業のためか、安定せる國內市場の創設を企図し得て、農業生産の安定と、發展とを導かうると考へてゐる。

即ち、リストが、工業と農業との完全な均衡を保つと國內的育成を指標し、國民的生産力の展開を企図したことは既往の如くであるが、就中、工業力に主導的地位を與へて、「工業と工場とは市民的自由と、啓蒙との、藝術と科学との、内外商業と海運と、交通改善との、又文明と政治との母であり子である。それは、農業をその柱格から解放し、それを一つの營業に、技術に、又科学にまで高めるための主要なる手段である」と稱してゐる。

かくて、一國經濟が、農工業段階に入つて、工業は漸次發展しつゝ、農業の中に、その生産物の販路を見出すと共に、又逆に農業から工業のための労働力及び、工業人口

の爲の食糧を仰ぐに至るのである。従つて農業は、海外市場にではなく、国内の工業人口のうち、農産物の最大の市場を見出すのみでなく、工業の發展に伴ふ、農具、肥料の改善は、農業そのもの、生産力を高めるのである。工業力は、その大部分が全く新しい力であり、それは、農業力を犠牲として獲得せらるべきものでは決してなく、何よりも農業力のより高い飛躍を助けるものである。工業は、一國の人口を二倍三倍にし、莫大の取引、多くの植民地の獲得と、大なる飛進を遂へる途を開くことによつて、それと全し割合で、食料品、原料品の需要を増加せしめ、農業家に、このより大なる需要を充~~足~~するたための手段と刺激とを與へ、これら生産物の交換価値を騰貴せしめ、かくて土地収益を、従て又土地の価値を比例的に増加せしめるのである。之に對し、反面より云へば、農業の發展が工業のより以上の發展に對する不可欠の條件となる。即ち、先づ何よりも膨脹しゆく工業人口のための食糧を国内に於て確保すると、いふ意味に於て、又工業生産力の増大に伴ふ工業製品の爲め国内市場の形成と

いふ意味に於ても農業の發展、その商品經濟化に從て旧い生産關係の解体は、工業力そのもののもの、展開の條件となるのである。

このようにして、農業—工業の分化と結合といふ發展形式によつて、一國々内市場は形成さ小、より多くの人口を包含しうるに至つて、又一段とその生産力は發展する。かくて、その國民經濟は進んで海外に市場を獲得するに至つて、その經濟は更により高次の段階に到達するのである。

こゝでは、農工業の均衡を保持せる調和的發展によつて、その國民經濟は成長の條件をと、のへ、拡大發展するに至るのであるが、資本と人口とは相平行して經濟發展の興件となり、逆に又その經濟力の發展が、その因子としての資本と人口との調和的發展を可能ならしめるとさしてゐる。

(五) 農工商業國と人口

上述の如く、單なる農業國はリストにとつては、片腕の人間であり、農工業の調和

的に發展せる農工業國に於てはじめて國民經濟の基礎は確立され、一步進んで農工商業國となり、工業力の發展に照応して、海外市場を獲得し、一つの植民國家となること加リスト的國民經濟發展の構想であつた。

然らば、かゝる段階に到達するには如何なる發展過程を全過すべきか、又それら諸國民經濟相互の關聯、は如何に理解せらるるか。

リストにとつて、國民經濟の構造が農業—工業の分化と結合であるとするれば、彼の世界經濟の構想は、熱帶—溫帶の分化と支配として理解せらるであらう。溫帶國の工業力が熱帶國を支配し、熱帶—溫帶の分化と支配とを通じて、工業生産物と原料及び食糧品との間の素材転換が完了せらるのであるが、かゝる状態が、リストにとつては國民經濟の往きつくべき理想状態である。而して溫帶國に於ける各國民經濟が、このような植民地帝國的條件を整備したとき、はじめて、國際的自由貿易の原則は貫徹され、平和な世界經濟的秩序が出来上ると考へたのである。彼にとつては祖國と共に、

また人類も無視するべきでなく、否、祖國への愛は、その裡に人類的存在を包含することによつて却つて高められる。「考へらるゝ最高の結合は全人類のそれである」と述べざるゝ。個人は孤立してよりも、國家及び國民の中に於て、その個人的目的を遙かに高度に達しうると企て、すべての國民は制定法と永久平和と自由交通とによつて互に結合せられるならば、遂かに高度はその目的を達するであらう。自然そのものも、諸國民を駆つて、漸次に右の最高結合へと進む進めである。即ち、氣候、土地、産物の相違は、自然に、各國家間の交換に向はしめ、人口過剰及び資本、才能の過剰は移住と植民とに向はしめる。この段階に於ては、國際貿易は、新たな慾望を喚起して、活動と努力とを促し、また新たな考へど發明と力とを一つの國民から他の國民へ伝達する所の文明と國民の幸福とを生む最も有力な槓杆の一つである」と考へるのである。

この如くリストに於ては、調和論的な自由貿易の可能が語られ、永久平和と世界聯合とが、まさに事物の本性 *Nature des Dinge* とされたのであり、諸國民經濟に

して、發展の段階にあり、生産余力の存し、自然の賦存のほほ存する限り、人口發展の傾向に就ては、何ら憂慮すべきところなく、常に明るい予測を抱いてゐるといへる。

しかし、こゝに注意すべきは、これは飽きまで彼の理想図であり、現実と相へだたること遠く、そこに現実的な政策家としてのリストが生れ、現実の諸問題を解決するために、独乙工業力の展開を容易ならしめら創途の方策が考慮されざるを得なくなるのである。即ち、英國への妥協の提案、中部ヨーロッパ的広域經濟圏形成への企図、及び移民政策等これであるが、これらの提案に於て、彼が洞察力鋭き經世家であつたことを知りうると共に、彼に日夜その解決を迫つて止まぬものか独乙工業の創成であり先進英國の圧迫であつたことが知られるのである。

独乙工業の育成によつて、独乙の國民經濟力は發展し、従つて、増加する人口を扶養しうるものであり、工業力の發展に全努力が傾注されるべきであるが、又他方消極面は於て、移民が、過剰人口の解決策として底急的な價值を示すであらう。リストは移民

に關しては、南米に対する通商と移民とを最も重要視した。彼は北米に対する移民の過重評価を戒め、北米西部に移住する独乙移民の多くは、單に独乙人をなくするのみにならず、独乙的工業力のための販路をも形成せしむ、むしろアメリカ工業力のための國內市場を形成するにすぎず反之、中南米諸國への移民は、全く異つた意義を有する。即ち、そこには製造工業發展の見込もなく、二、に全く新しい且つ豊かな工業品市場を占據することが出来ると、中南米移民に着目すべきことを提議してゐるのである。

(六) リストのマルサス批判

一如上によつて、經濟の發展段階に即したる彼の人口發展論とまじふべきものを概観したが、さて、最後にマルサス説に對して彼は如何なる見解を披瀝してゐるか、彼のマルサス批評に於て、彼の人口思想は一層鮮明に表出されたるであらう。

彼は先づ、この學派が、その前提とする万民主義經濟の**招來**のためには、後進諸國經濟が經濟すべき幾多の障礙を存することを指摘し、この學派が現實の無的把握に於

て重なる誤謬を犯してゐることを論ずる。即ち、各民族の文明化、地球全土の文明化への直接は人類の課題であり、文明國がその生産力を以て未開國を開発することは事物自然の理である。文明の影響下に、人口数、精神的諸力、物質資本は増大し、文明的により低い他の諸國へ流れてゆく。一國の國土が最早その人口を扶養し農業人口を勞働せしむるに不十分となると、過剩人口は他の耕作しうべき土地を求めてゆく、一國に於て才能ある者と、技術的修熟者の數が増加し、最早や十分の報酬を獲得しなくなり、彼らが必要される所へ移住してゆく。又資本集積の結果、利潤低下し小資本家が生活し得なくなると、彼らは、より未開の國に於てその資本を増殖せんとする。これ、事物自然の法則である。

アダム・スミスのいふ自由通商は、諸國民が全じ程度の文明、政治組織と権力とに到達するとき、はじめて實現しうることである。

保護政策は、後進國を先進國と同一列に到達せしむる唯一の方策である。マルサスは生産力の發展の傾向を誤認せるため、人口増加を抑制せんとする誤謬を

起した。又シスモンデイは、工場生産を以て公安を害するものと考へたのである。然し、彼らの理論は、自らの子供を一番みにせんとするサターンに他ならぬ。それは、人口と資本と機械の増加によつて分業を、分業によつて社会の幸福を説明しながら、終局に於て二水らの力を國民の幸福を脅威するものと説くのである。これは、この學説が、個々の國民の現状のみを眼中に置き、地球全土の状態と、人類の進歩とを少しも考慮に入れぬことの結果に他ならぬ。

人口が、生活資料より、より大なる度合に於て増加するとなすのは眞実に反する。地球上には尚許多の未知の自然力が存在し、それを利用することによつて、現存よりなほ十倍、百倍の人口を生活せしめ得るであらう。

與へられたる一定の土地に於て、生産力が有する現在の能力を以て、幾許の人間が扶養されるかを測定する一般の尺度となすことは甚だしく拙量である。かゝる計算によれば未州人、獵夫、漁夫はその百万人に必要とする土地を有しなかつたし、牧畜者はその一千万に必要とする土地を、又粗糞農業はその一億人に必要とする土地を有しな

かつたに相違ない、而も現在ヨーロッパのみならず、二億の人間が生存してゐるのである。農業技術の進歩の裨益は、生活資料を産出すべし人類の生産力を十倍にも増大した。更に又、何人かよく、人類の存見と、啓明と改良とは眼器を如くするであらうか。

マルサスの学説は、甚だしく偏狭であり、且つ自然に倖及するものである。それは、倫理と精神力を死滅せしめる恐るべきものである。自然が、人類に、その肉体と精神力とを緊張させ、その高尚な感情を喚起せしめ、育成せしむるために、最も有効な手段として使用する衝動—人類が、進歩の大部分を感謝しなすればならぬ衝動を滅殺せんとするものである。それは最も無情なる利己主義を法則化せんとするものであり、我々の心を閉ぢ、人間の心を化石せしめんとする。各自がその胸中に、心の代りに石を掘く國民に対し、我々は何を期待しうるか、一切の道徳、従つて又一切の生産力、一切の富、一切の文明及び國民の権力の徹底的没落以外に何物があるか。

一國に於て、その人口が生活資料の生産を越へて増加し、資本集積して、遂にその國民の生活が不可能となり、機械が莫大の人間を失業せしめ、商賣に過利を求たすは

すれば、此れは即ち、自然は、工業、文明、富並びに権力をたゞ一國民のみに與へるを欲しなむこと又耕作しうべき地上の多くが動物のみの住みかとなり、人類の大多數が依然として野蠻と愚智と貧困とに沈んでゐることの証拠以外の何物でもないといふのである。

彼の此如、マルサスに對する苛酷なき、秋霜烈日の批判は、彼の抱懐する生産力の理論と、國民主義の立場よりは當然のこと、云はざるを得ないが、かゝる批判のよつて来る、根本は、リストの抱く經濟思想が、現実に於て、實現を阻ばしめてゐる最大の理由が、前進國イギリスの經濟的繁榮であり、之に反撥する後進國獨逸經濟の育成の希望と悩みとに根ざす、歴史的な、革命的な、慾求に基ずるといへるであらう。

このことは、イギリス經濟と獨逸經濟との對立が一貫して彼の經濟論の基調をなしたことの証左でもあり、又彼の歴史的方法が、獨逸的方法であると共に多分にイギリス的構想の性格を會入してゐたことを物語するものに他ならぬ。換言すれば、リスト的深

題は、場所を変へた、又ミスの課題であつたといはうであらう。

又国内経済に於ける、農業、工業の關係、世界経済に於ける温帯熱帯の分化と支配との關係を取扱ふに当り、工業力の**調和**的性格のみに着目して、その相互的、抗爭的な性格を十分理解せずして、段階論的構想を**述べ**つたことは、勿論、リストの缺陥であるが、これは一つは拙乙資本主義経済そのもの、脆弱性に起因するものであり、他面に於て、それは、彼の鋭い現実考察によつて、よく世界経済の動向を洞察したることによつて救はれ、修正されてゐるといへるであらう。

要之、リストの人口思想も、その發展の思想と相表裏して理解さるるものであるが、又そこに、その人口思想の歴史性と限界が存するといひ得るであらう。